

特別寄稿
外国大学OB剣士から見た
学連剣友大会



東京学連剣友連合会
副会長 伊藤 昌孝またたか

東京学連剣友連合会（高橋 亨会長）は、関東学生剣道連盟に加盟する大学剣道部の卒業生を中心とする団体で、一般財団法人東京都剣道連盟に加盟しています。剣道の普及、振興に寄与すると共に会員相互の親睦を図り、学生剣道の健全なる発展に協力することを目的とした団体で、現在、登録会員300名、一般会員1500名、合わせて1800名の会員が様々な活動を行なっています。

昨年、創立50周年を迎え、記念祝賀会、記念大会を開催し、年末には創立50周年記念誌を発行して、これまでの先輩方のご苦労、ご努力に感謝するとともに、これからの更なる発展に向けての決意を新たにしたいところです。

当会では、毎年12月に学連剣友剣道大会を開催しています。これ



開会式で紹介される外国大学OB連合チーム

は、出身大学別の団体戦ですが、大きな特徴としては、男子の部は年齢別に3部（I部は22才以上の7人戦、II部は55才以上の5人戦、III部は65才以上の3人戦）に分かれていること、また女子の部は1部ですが、男子・女子共にポジション別に年齢制限があることが挙げられます。この結果、自分と同年代の相手と試合をすることにな

り、若い人も、ご高齢の人も、大学時代のライバルと久し振りに竹刀を交えることも多く、毎年白熱した試合が展開されています。

昨年12月13日(日)に第26回学連剣友剣道大会を東京武道館で開催しましたが、67大学、総チーム数222（男子I部86、II部58、III部42、女子36）、合計1198名の参加があり、今回も盛り上がった大会となりました。

当会創立から50年が経過し次の新しい50年のスタートを切る節目の大会として、また第16回世界剣道選手権大会が東京で開かれ、これからのグローバルな剣道のあり方が問われている状況も踏まえ、高橋会長の発案で、新しい試みとして、「外国大学OB連合チーム」を招待し、男子I部（22才以上の7人戦）に出場してもらいました。

参加していただいた選手は左記の通りです。

- 大將 J.J.Lavigne 61才 フランス
- 副將 Hartmut Walter 47才 ドイツ

三將 Jongsun Park 41才 韓国

中堅 Stuart Gibson 35才 英国

三鋒 Cain Lee 35才 オーストラリア

次鋒 Kwon Jung 39才 韓国

先鋒 Abul Hasan Johari 28才 マレーシア

試合は、残念ながら初戦で法政大学Bチームに敗退してしまいましたが、大会終了後に大会に参加しての感想文を送って下さいましたので、その抜粋をご紹介します。ご紹介します。（東京藝術大学美術学部体育研究室のHeechul Yumさんの訳です。なお、全ての感想文は、東京学連剣友連合会のホームページ <http://wp.gakuren.jp/?p=541>に掲載してありますので、是非ご覧下さい）

J.J.Lavigne（大將）「大会に出場したチームの数や選手たちの強さ、剣道の素晴らしさに驚きましたが、何よりも印象深く感じたことは、選手たちの年齢でした。若

い方から、高齢の方まで、彼らの試合を見て、やはり剣道は他の競技と異なり、スポーツではないことを実感しました」

Hartmut Walter (副将)「ヨーロッパでの大会は若者たちだけの大会になっていくため、40以上の選手が出場することはなかなか見られない光景である。決勝戦で70才の選手の素晴らしい試合を見て、このような試合がヨーロッパで見られないのは剣道界の大きな損失であると痛感しました。私は機会があれば、このような雰囲気・試合をドイツにいる仲間たちにもぜひ見て感じてほしいと思います」

Jongsun Park (三将)「普段、『剣道はこうである』という本や剣道に関する映像をよく見ていますが、20代から80代までが一堂に会した今回の大会を経験し、これまでの自分が理解していた剣道とは異なる剣道の一面を見ることが出来ました。(中略)自分の試合が終わってから『相手がいるからこそ自分自身がいる』という事実と『相手を通じて、私がどう修練

してきたのか』についても一度考える良い機会となりました。今回の大会に参加出来たことを通じて、『私自身も相手にとって良い相手になるために、良い心構えを持って修練に臨まなければならぬ』と思いました」

Stuart Gibson (中堅)「みなさんは、この大会が大学チーム間のライバル意識と競争心のみが生きている空間だと思っているかもしれませんが、私にとっては、競争者として大人に成長した人たちの温かい心と友情が感じられる空間でした」

Can Lee (三鋒)「ハイレベルの日本の剣友と競い合う大会に参加出来るのかというオーストラリアの多くの剣友からの質問に対し、今は『イエス』と言えると思います。しかし私たちへの海外からの高い期待に応えるためには、ハードなトレーニングを続けなければならぬと思います」

Kwon Jung (次鋒)「これまで、日本剣道は韓国剣道と比べて異なるものだと思ってきましたが、今回の大会に参加し、それは間違っ

ているかもしれないと感じました。一番印象深かったことは、競技場と武道館を守っている剣道人の心、秩序整然とした観客、最後まで席を外さずにすべての試合を観戦しながら、お互いに意見を交わす先生たちの光景が今でも胸の中に残っています」

Abul Hasan Johari (先鋒)「大会が始まる前から終わった後まで、



外国大学OB連合チーム

この大会からは大変強い印象を受けました。開会式での先生方のお言葉から、これからの剣道を思うと心ならず心がドキドキしました。このようなハイレベルな大会が、より多く外国人に広がることが出来ればいいなと思っています。絶対みんなが喜んで参加しますから」

皆さんの感想からは様々なことが感じられますが、共通して言えることは次の二点だと思っています。一つは、20代から70代(今回の参加者の最高齢は79才でした)までの剣士が一堂に会し、しかも自分と同年代の人と試合が出来る大会に対する驚きと称賛、もう一つは、我々日本人剣士と同じように、ひよっとするとそれ以上に、外国人剣士たちが剣道というものに対して、ひたむきで熱い気持ちを持って取り組んでいるということだと思います。

東京学連剣友連合会は、これからも会員の皆様と一緒に、様々な企画・行事を通じて、剣道という伝統文化の活性化に取り組んでいきたいと思っています。